

熱を持った大きな手が、こわれものに触れるみたいにそっと私の頬を包む。
吸い寄せられるように、くちづけが降った。

柔らかな温もりは湿り気を運び、水音が絡み合うみだらなものとなる。

逞しい腕と鍛え上げられた筋肉質の体に抱かれて、安心感とともに、体の中心が熱を持った。

武器と精霊を思うがままに使役するその手が——やがて、彼のために開きつつある私の秘所に到達する。

また、この夢だ。

「……好きだ。君を、愛している。早く、君を僕だけの『運命の番』に——」

※

ゆらゆらとまどろみに揺蕩う私の耳元に、柔らかな低い声が囁かれる。

「——おはよう。昨夜はよく眠れたかい？」

「……ん……ルクフォード様……？」

身動きをして、シーツに腕をさまよわせる。隣にその温もりがあることを期待して抱き留めたのは、柔らかなクッションだった。

目を開けた先には、淡い緑色の光が揺れている。この小さな風の精霊をとおして、遠く離れたところからでも、あのひとの声がこんなに近く届けられているのだ。

未だ夢の中でしか抱き合ったことがないはずなのに——この起こし方のせいで、いつも夜をともしたかのような錯覚を抱きながら目覚める。

柔らかな青と白で統一された豪華な部屋の中を見渡して、今日もまたこの夢のような日々から醒めていないことを確認するのだった。

「やっぱり、どう考えても現実だよね……」

ある日突然、異世界に迷い込んでしまった。

乙女ゲームの世界に転生してしまう物語をたしなんでいた身としても、こんなことが本当に起こるだなんて思ってもみなかった。

今でも、長い夢なんじゃないかと疑っている。

幻覚にしては鮮明で、美しく、色も香りもある。

見知らぬ世界に放り出されて泣きそうになっていた私を見つけてくれたのは、王国軍のトップである最強の軍人にして、北の公国を治める公爵殿下であるルクフォード様だった。

私を襲ってきた巨大な魔物を一撃で死に至らしめ、異世界人の出現にざわつく王宮の人々から庇い、こうして居場所を与えてくれた。

穏やかな眼差しと優しい言葉に、どれだけ安心しただろう。

精霊がいて、魔法が使えて、王様や貴族がいる。

いわゆる、西洋ファンタジー風の世界観のようだ。

ルクフォード様に拾われてから、このお屋敷を一步も出られていないから、この世界のことについてはほとんど知る機会がない。

たった今彼自身が側にいないことに少しだけ寂しさを覚えると、律儀なノックの音が響いた。

この部屋を訪れるのは、あのひとしかない。

「今、起きたところかな。よければ、朝食と一緒にどうだろうか」

精霊を通してではなく、扉越しに投げかけられるくぐもった声が耳を打つ。私は、嬉しさと緊張にベッドから飛び上がった。

「……あ……はい！ すみません、すぐに支度します！」

起き抜けで芯のとおらない声を張り上げると、ひかえめな笑い声が返ってくる。

「急がなくてもいい。こうして君を待つ時間は、僕の人生において有意義なものだ」

最強の武人であり、大貴族の当主としても多忙をきわめるルクフオード様は、一日の中で必ず私のために時間を作って、こうして会いに来てくれる。

今朝のように朝食をとにもする日もあれば、午後のティータイムに甘い甘なお菓子とともに誘われることもある。

あるいは、眠る前のひとときに、私が寝入ってしまうまで耳に心地よい声でお話してくれることも。

そのままルクフオード様に触れられる甘い夢に突入するから——夢か現実かわからなくなるのだ。

このひとはいつも私の夢に出てきて、私に愛を囁いてくる。そっと触れられる感触は、夢だとは思えないほど確かな熱を持っていて——現実かと錯覚してしまいそうになる。

朝起きると、いつも下着をだめにしてしまっている自分が恥ずかしい。

扉越しにルクフォード様がいるのに、汚してしまった下着を脱いで新しいものに履き替えるときの背徳感は、いつまでたっても慣れない。

精霊をとおして見られてしまっているんじゃないか、なんて考えすら浮かんで落ち着かない。

彼の貴重な時間を無駄にしてはいけなないと、私は大急ぎで身支度を整える。ルクフォード様が用意してくれた沢山のドレスや装飾品の中から、彼の瞳を思わせる淡いブルーの色合いのものを選り取った。

部屋付きの小さな精霊たちに手伝われながら、なんとか見苦しくない程度に仕上げた鏡の中の自分を見て——まるで絵本の中のお姫様みたいなその格好を見慣れつつあることに、不思議な感覚を覚えた。

容姿すら、まるでこの世界の仕様になったかのように、元いた世界での私とは全く違ってみえる。

ベッドルームを抜けて、足早に応接間に向かう。
深呼吸をして、扉の向こうにそっと声をかけた。

「……お待たせしました」

彼にしか開くことの出来ない重厚な扉が、光り輝く魔法陣を浮かび上げながらゆっくりと開いていく。

華やかで圧倒的な存在感が、一瞬でその場を支配した。

朝陽を含んできらめく、深い真紅の髪。品のある艶やかな毛並みは、どこか幼さのある整った顔立ちをふちどるとともに、野性味と可愛らしさの同居する三角形の耳をかたどっている。

澄んだ空色の瞳が、私をまっすぐ射抜いた。

——眩しくて、目がつぶれそうだ。

毎日顔を合わせていてもいっこうに慣れずに、つい見惚れてしまう。

「今日も、君の顔が見られて嬉しいよ。そのドレスも、よく似合っている」
「私も、今日もルクフォード様にお会いできて嬉しいです。……本当ですか？」

「ああ。苦しくはないだろうか？ 以前のように、息苦しさを感じたりだとか……」

「あ、はい！ おかげさまで……。いつも、ありがとうございます」

慣れないコルセットに気分が悪くなってしまっただけ以来、ルクフォード様は過剰なくらいに気にかけてくれる。最近流行りだしたという胸の下でリボンを締めるタイプのゆったりしたドレスを、私のためにいくつも取り寄せてくれた。

「ルクフォード様が、たくさん贈ってくださるので……」

彼は私に、毎日おびただしいほどの贈り物をくれる。

私が退屈しないように、不自由をさせないように。

そう気遣ってくれるルクフォード様の厚意に、くすぐったいような申し訳ないような気持ちになる。

首が痛くなるほどの至近距離で見上げれば、ひどく柔らかな微笑みが返ってくる。

抱き寄せるかのような仕草で、私を部屋の中へエスコートしてくれた。彼の後ろで、扉が閉まる。

「君は僕の、婚約者だからね。君が心地良く過ごせるよう気を回すのは、当然のことさ」

私は、この美しいひとの婚約者、ということになっているらしい。

この見知らぬ世界で初めて出会ったひとで、私を拾い、婚約者の座におさめることで身分を保証してくれた。

信じられないし、夢みたいだ。騙されているのかと思うくらい。

だけど、そんな疑念を抱くのも憚られるくらい——私に接するルクフォー
ド様は、いつだって優しい。

並んで座ると、精霊たちが給仕をはじめ。

すぐさま、高級ホテルみたいな豪華な朝食が用意された。

「今、紅茶を淹れよう」

「あ……いつも、すみません。よかったら私がやります……！」

「いや、一日の始めの一杯を注ぐのは夫の仕事だ。誰にも譲れない。使用人
にも精霊にも、君にもね」

「お、夫、ですか……」

「すまない、気が早かったかな。だが、僕としては既にそのつもりだ。……
いけないかい？」

妖艶に首をかしげる仕草が、私から言葉を奪う。

「……………いけなく、ないです……………」

「そうか。それなら良かった。……………今日は、北の山の奥地に咲くスノウリリ
ーと、この地で採れたホワイトベリーを乾燥させて混ぜ込んだ茶葉なんだ。
気に入るといいが」

軍人らしくすつと伸びた背筋と、貴族らしい気品のある動作で紅茶を淹れ
ていく姿に見とれてしまう。

「——どうぞ、召し上がれ」

「いただきます」

上品な花と、甘酸っぱい香りのする果実。そして香り高い茶葉の香りが、
口いっぱいに広がった。

「美味しいかい？」

「はい……！ すっごく美味しいです。……あれ？ この香り……ひよっとして、いつも飲んでる『寝つきがよくなるお茶』にも入ってませんか？」

「……よくわかったね。とても貴重なものだが、量や配合によってさまざまな効能を持つんだ。効きは始める時間もね」

「へえ……。あれを飲むと、本当にぐっすり眠れるので。いつも助かります」

「それはいい。君が不安で寝つけないだろうからと、特別に用意している甲斐があるよ」

そんな風に、濡れたような色気をまとって見つめられると、紅茶どころではなくなくなってしまふ。

今朝は、とくに。ときおり、くすぐったくなるような愛情のこもった視線を送られている気がして、落ち着かなくなる。

「失礼」

不意に、手が伸びてくる。真剣な瞳に、息をするのも忘れた。

そっと触れた指先に、身体が熱くなる。

猫を愛でるような優しい手つきが心地良くて、思わず目を細めた。

「ここ」

「……はい？」

「毛先が、跳ねているのが愛らしくて……気付いていたのに、しばらくそのまま見つめてしまっていた。すまない」

「え!? そんな、さっき鏡で確認したのに……。はずかしいです、お見苦しい姿をお見せして」

「ん、もう直ったよ。気にすることはない、どんな君でも……。」
ルクフォード様の指が触れたところに、小さな光が灯る。

「とても、きれいだ」

新鮮な花の香りが掠めて、彼の指が私の耳に触れた。よく知る、甘い香りだ。

瞬間——そこから甘いしびれが全身へと伝わって、息を飲む。

「……っ」

キスしてしまいそうな距離に、今朝の夢を思い出す。彼のまなざしが、どこか昏い欲を帯びた。

「——これが、スノウリリーの花だ。君に、よく似合う」

「……あ……ありがとう、ございます。きれい……。すみません、私、もらつてばかりで——」

とろけるような甘い香りが脳髓にしみこんで、くらくらしてくる。

毎夜眠る前に記憶に刻まれた香りだから、体が条件反射してしまっているのかもしれない。

「僕が、好きでしていることだ。君をよろこばせたくて……。むしろ、謝るのなら僕の方だろう。現状、君をここに閉じ込めてしまっていることの、償いにもならない。——そして、これからのことも……」

「償い、だなんて……。行く当てのない私をこうして拾って、面倒をみてくださってるだけで、感謝してもしたりないくらいです！ 本当に、恵まれすぎてますよ」

「……君を見つけたのが僕で、本当に良かった。でなければ……。こんな風に、君とかけがえのない時間を過ごすことは出来なかっただろうから」

「私も、本当によかったです。最初に会えたのが、ルクフォード様で……」

「君がそう思ってくれているなら、僕も嬉しい。早く、君にこの世界の美しい景色を沢山見せたい。僕の、隣で」

窓の外には、遠く雪に覆われた峻厳な山々がそびえ立っている。

もう少ししたら、厳しい冬が訪れる。

春になれば、雪解け水で育まれた沢山の花々が咲き乱れるらしい。

すべて、ルクフォード様が語ってくれたことだ。

「だが、君の身の安全を考えると……もうしばらくは、この部屋にいてもらうしかない」

この部屋の外は、そんなに危険なんだろうか。

私には、わからない。

ただ、ルクフォード様に寄り添われて一度だけ王宮をおとずれた際の、人々の奇妙な視線が忘れられない。

あれは一体、どういう意味だったんだろう。

ルクフォード様が私との婚約を宣言し、急ぎ領地に連れ帰ってくれたから、深くはわからなかった。

出来ることなら、知りたい。彼に、こうして丁重に守られるだけじゃなくて——この世界で私が置かれた立場というものを、きちんと理解したい。

「はい。……そうだ、今日は例のお茶会ですよね？　少し、緊張して……貴族令嬢の方に、失礼がないかとか」

瞬間、ルクフォード様の表情がにわかに硬くなる。

「……その件についてだが。本当に、僕以外の者と会うつもりかい？」

「それは……ルクフォード様にばかり構ってもらっていて、悪いので。お忙しいのに……」

「僕が構いたくて構っている。君との時間は、むしろ癒しだ」

「そ、そうですか？ でも……女の人とも、お話してみたいなって」

「僕も、変身術で令嬢のような姿を取ることには出来る。お望みならそうするが？」

「ちょっと、興味はありますけど……！ そういうことじゃなくて」

いつも泰然としているルクフォード様が子供のように駄々をこねるから、少しだけ微笑ましくなった。

とはいえ、引き下がるわけにはいかない。

「僕以外の者と交流したいという、君の望みを叶えてあげたいのは本心だ。だが、それ以上に……心配で、気が気でないんだ」

「ルクフォード様……。心配、してくれてるんですね」

「せめて、日を改めるのはどうだろう。僕も同席出来るよう、予定を調整して……そうすると、しばらく先になってしまうが」

「しばらく先、というと……？」

「……半年後くらいだろうか」

「半年!? 結構先ですね……! いえ、やっぱり急に断るなんて失礼でしょうし。私としては、出席したいんですけど………だめ、ですかね？」

「……駄目、ではない、が。……念のため、使い魔と精霊を沢山つけておくことにしよう。護身用に」

「ルクフォード様、ちょっと過保護すぎませんか……？」

「これもまた、僕の我儘だ。甘んじて受けて欲しい」

あつという間に色とりどりの光に群がられて苦笑する私だって、ルクフォード様の心遣いが嫌なわけじゃない。

「ひとつ、訊きたいことがあるんだが」

「はい。なんででしょう？」

「君は毎夜、夢を見るかい？」

「えっと。夢は、見るんですけど……」

「どのような夢を？」

「それは……」

真剣な表情でたずねられて、返答に困った。

毎晩、夢の中であなたに抱かれそうになってますとか、本人を前にして言えるわけではない。

「その夢の内容が、僕にとっては非常に重要なんだ。どうだろう？ 教えてはくれないだろうか」

「えーっと、それはちよつと……秘密にしておきたいんですけど」

「……そうか、残念だ。——これを」

「？」

光とともに、装飾の施された立派な箱が現れて、ひとりでに開いた。繊細な銀細工が彩る、淡い空色の見事な宝石の嵌まった首飾りだった。

「わ……すごい、きれいな宝石……！」

「君への贈り物だ。どうか、絶対に肌身離さず身に着けていて欲しい」

「肌身離さずって……なくしたり、壊したりしそうで怖いんですけど……！」

「それについては心配ない。守護魔法が掛かっているから、多少乱暴に扱ったところで傷ひとつ付かないだろう」

「そうなんですか？ 本当に……!?」

「ああ。試しにやってみせようか？」

「いやいいです!! 大丈夫なので……！」

「ふふ。冗談だよ」

はらはらする私を見つめる視線は、愉快的色から情が燦るものへとうつろつていく。

「僕がこの手で、着けてもいいかい？」

「あ、はい——」

首に、ルクフォード様の手が回る。近すぎる距離に、思わず息を止めた。夢の中で、何度も見た光景が重なる。

指先がそつとうなじに掠めて、またも、身体に痺れるような快感が走る。やがて、互いの吐息が触れた。

絡み合った視線は、そらすことも出来ないほどだった。

「……ああ。やはり、とてもよく似合う。——これを僕だと思って、いつだって側に置いてくれ」

そう囁いて、首筋を撫でられるだけで。

湿度をまとった情で、絡め取られるようだった。

※

「初めまして、御機嫌よう」

「は、初めまして！ 本日はお日柄もよく……」

「単刀直入に言わせていただきます。——ルクフォード様との婚約を解消してくださいませ」

堂々たる金髪の美人令嬢から飛び出したあまりにも直截な物言いに、しばし言葉を失った。

軽く挨拶をかわした直後に切り出されたその台詞こそ、彼女がどうしても私に会いたがった理由なのだろう。

「歴代最強とうたわれ、領主としても名高いあの方の婚約者という名誉ある地位に、異世界人はふさわしくありませんわ。たとえ、過去には異世界人が高位貴族だけでなく、王族の血脈にさえ名を連ねることがあったとはいえ……異例には変わりないこと。この世界の誰も、貴女が殿下と結ばれることを祝福しておりません」

真っ向から否定を突きつけられて、どう言葉を返していいかわからない。私が黙り込んでいると、品定めするように私を見た彼女が眉をひそめた。

「こんなにも嚴重に、精霊と使い魔をまとわせて……殿下ったら、過保護ですのね。それとも、わたくしが信用されていないのかしら？」

他の人から見ても過保護って印象なんだ、と現実逃避しかけて——その蛇のような視線にはりつけにされる。

「寵愛ぶりがうかがえて……幼いころから殿下一筋だったわたくしは、嫉妬に気が狂いそう」

扇子を持つ手が、ずっと私の首元を指した。

「その、貴重な魔宝石……きつと、わたくしへ思い知らせるため、なのでしようけれど。その価値もわからない貴女には、勿体ありませんわ」

そんな気はしていたけれど、やっぱりするごく価値のあるものなんだ。

高貴な緑の瞳から放たれる毒矢のごとき陰を孕んだ視線を受けると、いっそう重たく感じた。

まるで、美しくも貴重な首枷をつけられているかのように。

次の瞬間、そのととのったかんばせに影が落ちる。

「……貴女。『呪いの予言の』についてはご存知？」

「呪いの予言……ですか？」

初めて聞く言葉をオウムのように繰り返す私を一瞥して、彼女は小さくため息を吐いた。

「そのご様子じゃ、殿下はお話していないのね。あの方なりのお考えあつてのことだとしても……ルクフォード様を誰より慕う身として、口出しをせずにはいられません。わたくしは、あの方の御命が何よりも大事……。ええ、わたくしの恋心なぞよりも」

彼女の覚悟を示されて、その真剣さに圧倒される。

「先々代が北の邪精霊を討伐した折、あの方に掛けられた呪い。——二十五の齡までに運命の番を得て契らなければ、あの方は命を落としてしまうのです」

「——え……?」

明かされた事実には、私は愕然としてしまった。

「この忠告を聞き入れて、潔く身を引くのであれば……後のことは、わたくしが面倒をみます。決して、悪いようにはいたしません。我が家の後見のものと神殿に上がり、聖女として奉仕するのです。この世界を統べる精霊に呼ばれてしまった身寄りなき異世界人として、それは最も高貴で尊きお役目。どうか、よくお考えになって——貴女自身の正しい身の振り方と、お世話に

なつたあの御方のために」

※

あれからすっかり、茫然としてしまっていた。

花瓶に飾られた今朝のスノウリリーだけが、変わらぬ香りを放っている。

首元に手をやって、無意識に魔法石を撫でる。

こんな素晴らしい宝物、私にはふさわしくない。外しておこうと思って、首の後ろに両手を伸ばす。けれど、もつれてしまつて上手く外せない。

仕方がないから、テーブルの上にある一枚の書類を手を取った。

彼女に渡された、聖女としての契約書だ。ここに名前を書けば、契約は成立するらしい。

突如、精霊が騒ぎ出した。

「――失礼。今すぐ、話がしたい。開けても構わないだろうか」

「え……は、はい！」

返事をするにすぐさま、真紅の髪を焰のように揺らして、彼が部屋の中に突入してくる。

「ど、どうかしましたか？」

「……いや、なんでもない。ただ……君に、会いたくて」
そう口にした彼が、切なげに瞳を細める。

心臓が掴まれたようになりながら、彼をカウチへと連れていき並んで腰を下ろした。

「……ルクフォード様。御髪が……」

「あ……すまない。常日頃、身嗜みには気をつけているんだが……今夜は少し、急いでいたから」

「そっちじゃなくて……。触っても、いいですか？」

「構わない、が。……いいのかい？」

それは、どういう問いだっただろう。

私は頷いて、私の世界の中心である太陽のような存在に手を伸ばす。

初めて、私から触れてしまった。

艶のあるさらさらの髪は、実際に触れると驚くほど心地良くて、永遠に撫でていたくらいだった。

揺れる心に寄り添うように、彼の手が添えられる。

こんなにも安心して、心が浮き立つような温もりを——この世界に来てからずっと、このひとに与えてもらっていた。

もう、十分。これ以上は、いけない。

彼の慈悲深い心によって与えられたこの特等席に、私が居座り続けるのなら。

彼の髪や、その手に触れて、こうして向けられる表情を独り占めする特権を、私が握りしめてはなさないでいたら。

彼はきつと、命を失ってしまう。

そんなこと、あつてはいけない。だから。

……これから切り出すことを思うと、名残惜しさに胸が痛んだ。

息を吐いて、手を離す。

「……もう、やめてしまうのか？」

「もう、直りましたから。——ルクフォード様」

「………なんだい？」

「……婚約を、解消していただけませんか」

ルクフォード様の瞳が揺れる。

私も、心が揺らいだ。

「……何故だか、理由を訊いても？」

「それは………私じゃ、ルクフォード様には相応しくないから、です」

「そんなことはありえない。僕の伴侶として、君以上に相応しい者はいない」

迷いのない断言に、怯みそうになる。

「でも………」

「相応しいか相応しくないか、それは君が決めることかい？」

大貴族然とした有無を言わさぬ物言いに、本能的な畏れを抱く。
確かにそれは、ある意味傲慢かもしれない。

「君が異世界人であることも、重々承知の上だ。……ようやく、君を見つけたんだ。手放すなんて、出来ない」

「でも、いけません」

「どうしていけない？ あるいは、君が僕のことを本当は受け入れ難く思っていて、それを婉曲に伝えてくれているのであれば話は別だが」

「そんなことは……！ ありえないです。私は、ルクフォード様のこと……っ」

この先は言えない、言っではいけない。

だから私は、果たすべき役目を果たすだけ。

「……この契約書にサインすれば、聖女として、この世界のお役に立てるって聞きました。私に務まるかは、わかりませんが。そうすれば少なくとも、居場所は確保出来ますし」

「僕の用意したこの場所では不服かい？」

「そんなわけありません！ ただ……今日まで甘えてきてしまいましたが、私にはきつと、相応しくないものですから」

ルクフォード様から注がれる惜しみない優しさや、確かに感じている愛情
としか思えないもの。

それを『相応しくないから』といって拒絶するのは、ひどく心苦しかった。

けれど私が婚約者という席に座り続けることによって、このひとに失わせ
ているものがあるのなら——私は、なんとしてもそうしなければなら
ない。
たとえ、彼が私のためにととえてくれる安全で心地良い箱庭の中での暮
らしを——私に笑いかけてくれる彼自身を、手放してでも。

「……聖女、か。僕は君をそんなものにさせないために、こうして屋敷の中
で嚴重に匿っているんだが」

「……え？」

彼は何もない空中から、古びた一冊の本を取り出す。

「これは我が家に伝わる、過去の聖女が残した手記だ。中身を見てみたが

……ひどいものだった」

「……ひどいもの、って」

「聖女という役職は、異世界人をこの世界に奉仕させるための大義名分にすぎない。その実態は、ぼろ雑巾のように使い捨てられると言っても過言ではないんだ」

「……そんな……」

「それでも、僕の元を離れて神殿へ？ ……なんて、君を行かせるつもりなど毛頭ないんだが」

ルクフォード様は契約書を翻すと、その手の中で青い焰が燃え上がり――塵すら残さずに消えてしまった。

「たとえ君に嫌われてでも、僕はそれを許しはしない。君を見つけた瞬間、僕の婚約者の座に半ば強引に押し込めたのは……君の立場を保証すると同時に、君が聖女になる道を潰すためだったんだ。聖女は、純潔の乙女しかなれ

ないからね。……はじめから君を手放すつもりなどない僕のことを、卑劣でおそろしい男だと軽蔑するかい？ 庇護の名のもとに自由を奪い、僕の側に縛りつけて君を離さない……身勝手で残酷な僕のことを」

自嘲するような昏い瞳に、息が詰まる。

「そんなこと……！ ルクフォード様には、本当にお世話になりました。だから、私……このご恩を返すためなら、なんでもします！ だから——」

そんなことしか、言えなかった。

私が、ルクフォード様を悪く思うことなんてありえない。だって、ルクフォード様はいつだって私を守ろうとしてくれる。

そんな恩人だから、好きだから——ただ、生きていてほしいだけ。

「……『呪いの予言』のことを、聞いたんです」

祈るように手を組んで、ふるえる声で告げた。

「……………僕に刻まれた、死の呪いのことを？」

「……………はい……。だから、ルクフォード様のお命を救うためには、早くその運命のお相手を見つけないと……。私なんかに構ってる場合じゃ、ないんです」

「君がその『運命の番』なのとしても？」

「……………そんなわけ、ないから……。私なんかが、あなたの『運命の番』だなんて、ありえません」

いつも感情を荒げないルクフォード様が、苛立ちをあらわにしている。
端正な顔を歪めて、呻くように息を吐いた。

「僕の命は、君にしか救えない。僕は、そう思っている。そう……確信しているんだ」

「無理です、出来ません……！ 私じゃない、本当のお相手がきつと——」
「なんでもする、と。今、君は言ったね」

言葉を遮って、ルクフォード様の大きな影が私を覆った。

私の手を取り、見せつけるようにくちづける。

赤い舌が私の手のひらを濡らし、指をなぞるだけで——体の芯が熱くなつた。

「……っ……」

「ならば、命令させてもらおう。僕は今から、君を本当に手に入れるために、君に触れようと思う。嫌だと感じたら……僕を拒絶し、僕の命を奪ってくれ」

彼の胸元に当てられた、私の手。どく、どく、と強く脈打つ心臓に呼応するように、私の中で、何かが暴れ出すようだった。

「……そんなこと、出来るわけ……」

「ああ、君には荷が重いだろうね。だから呪いのことを知られてしまえば、心優しい君は同情で僕を受け入れざるを得ないのではないか、と。そう危惧していたんだが……まさか、拒絶されるとは。僕の手を離れて、聖女なんてものになりたがるなんてね。——どうやら、躰が必要なようだ」

「えっ、あ……!」

抱き上げられて、たやすくベッドに運ばれてしまう。

少しだけ乱暴に押し倒されて、ルクフォード様という雄に征服されてしまう予感にふるえた。

その体が作る堅牢な檻に、決して逃げられないはしなないことを確信する。

「君は僕のことを、どう思っている？ 憎からず思ってくれているのなら

……」

陶酔めいて囁く、甘く低い声に。ずっと恋焦がれていたことを、見透かされてしまいそう。

「ずっと……こうして、君に触れたかったんだ。君は知らなかったろう、出会った瞬間から……この衝動を、抑え続けていたんだよ」

捕まえた獲物をいたぶるように、ゆっくりとくちびるをなぞられる。

それだけで、背筋が粟立ってぞくぞくした。

「君が自ら、僕を欲し求めるように……ゆつくりと交流を重ね、出来るだけ待つてあげたかった。けれど、わからずやの君に教え込んでやらなければならぬ。——僕の『運命の番』は、君以外ありえないと」

「あつ……ルクフォ——んん……っ」

そのまま、熱い舌が侵入してくる。

唇の内側をなぞられて、びりびりと電流のような快感が走った。逃げおくれた舌をとらえられて、甘やかすようにくちゅくちゅと絡められる。

上顎をくすぐられて、体が暴れそうになるけれど、がっしりと抱き留められていてびくもしない。

我が物顔で口内をいっぱい満たして、蛇のように狡猾に這いまわる長い舌に、ただひたすらに翻弄される。

生々しく濡れた感触が、確かな快感が——これが現実だと伝えてくる。

刷りこまれるように何度も繰り返した見た夢の、欲望を煽らせる表情が、たつた今日の前にあった。

夢じゃ、ない。

ようやく与えられた果実にかぶりつくみたいに、私から求めてしまった。

——だって本当は、ずっと欲しかったから。

あのみだらで幸福な夢の、その先が。

首筋をたどる濡れた唇に、しびれるように肌が粟立つ。

「やっ……ま、って……っ……あ……っ♡」

「待てない。だが、君が嫌がることはしたくない」

「っ、ルクフォード、さま……」

男のひとの欲望をたたえていながらも、いつもと変わらず優しい彼であることに、つかの間安堵する。

「だから……君自身が、僕を求めてしまうように。君が、僕に触れて欲しくてたまらなくなるようにしてあげよう」

「……そん、な……あつ、ん……♡」

迷いのない手つきでネグリジェの紐をとかれ、あらわになった胸元にキスを落とされた。

ちょうど、心臓の位置。

まるで、儀式のようなくちづけ。

それを、契機にするかのように。しずかな水面に波紋が広がるみたいに、ルクフォード様の魔力に感応してしまう。

欲が、快感が、体の内からあふれるように私を満たしていき——発情、
してしまうみたいだった。

「——あ……な、に？ 何、これ……っあ……♡」

「安心して、僕に堕ちて来たらいい」

なんだかそれは、もっとひどいことのような気がした。

無理やりされるよりも、私自身の意志を堕とされることのほうが……ずっと
とそらおそろしくて、きつと取り返しがつかない。

だけど——ほんの少しだけ、たしかに期待してしまっている私がいて。

そのことに、早くも降伏してしまいそうになる。

「番となるべき二人は、魔力の相性がひとときわよいとされている。ただこうして肌を重ね、唾液を交換するだけでも著しく増幅され、尋常でない快感が生じ——発情してしまうんだそうだよ」

「え、え……つや、あ……♡」

媚薬でも飲まされたみたいに、頭がぼうつとして、身体がじんじんする。私の輪郭をなぞるように肩や腰を撫で、私に触れる彼の指が、あつい。きもち、いい。

「夢の中で、何度も君を抱いた」

「え……？ 私、も。夢の、中で……」

ルクフォード様に、こんな風に愛されていた。

おそらく、最後の一線をこえたことはないけれど。

「同じ夢を見ていたということだね。それはつまり……僕たちが、『運命の番』に違いないという証だ」

「……………♡そう、なんですか……………」

「ああ。だから僕は、君の見ている夢の内容を知りたがった」

あの問いには、そんな意味が？

焦らすように、愛でるように。背中やおなかをゆつくりと撫でられるたび、肌の下が疼いてびりびりとしびれる。

「ん、っ……………♡ルクフォード、さま……………っ……………」

もつと触ってほしいって、思わされてしまう。

そつと胸に這わされた手があたたかくて、心地がいい。

もつと——めちゃくちや、にされたい。

私を見下ろすルクフォード様の表情は、獲物を見定めた獣みたいだった。

服の上から、かりかり♡すりすり……♡と刺激を繰り返されると、あつと
いうまに吐息が乱れる。

「ん……っ♡や、あ……♡だ、めです……っ♡だめなの、に……っ♡ふ、う
っ……♡」

布越しの快感が、すぐにもどかしくなるくらい。
欲に、溺れてしまいそうだ。

「気持ちがよさそうだ。もっと、して欲しいかい？」

「あ……♡っは、い……♡」

思わず、肯定がこぼれた。それを見逃すルクフォード様ではなくて、完全
に服をむかれてしまう。

「や……♡ん、んう♡そ、れ♡それ……っあ♡」

すくうように、やわやわ♡と胸を揉まれる。

つんと上を向いて硬くなったそれを、摘むようにとらえられた。

「んんっ♡あっ、ああ……っ♡」

きゅう♡とつよすぎない刺激を与えられて、待ち望んだ快感を知る。

指先でつままれて、執拗にこすり合わされると——たまらなく、きもちがいい。

「あ……♡や、あ♡や、だ……♡っや、め♡ん、んっ♡んう♡」

くにくにくにくに♡絶妙な力加減でこねられて、腰がふるえてしまう。
逃げようとした体をぐっと押さえつけられて——体の中心に、信じられないくらい硬いものがめりこんだ。

「ひう……っ♡やあ♡そん、な……♡♡」

たった今、私へと向けられている彼の欲情の証を目の当たりにして、怖じ気づいてしまう。

同時に、どうしようもなく興奮してしまつて——氣を抜いたら、はしたなく腰をこすりつけてしまいそうだった。

「夢の中の僕は、どんな風に君に触れたか覚えているかい？」

「……あ……おぼろげ、で。はつきりとは………っあ、♡あっ♡ん♡♡」

自分から動くまでもなく、ぐい♡ぐい♡とガチガチになったおちんちんをおしつけられて喘ぐ。

本当は、覚えてる、のに。

いつも夢の中でしつこく愛でられているクリトリスが、期待でばんぱんになつているのがわかる。

早く、されたい。

じんじん♡ひくひく♡してしまつているおまんこが、物欲しそうに蜜をたらした。

「そう。では、これから……じっくりと、その身に教え込んであげよう。どうか、目をそらさないで。僕を感じて……君だけの男であり、雄である僕を」

見せつけるように、上品なお顔にはいささか野性的すぎる、狼のように長い舌がのぞく。

彼が次に何をしようとしているのか、言われなくてもわかってしまった。

「あ……♡や、めっ♡だめ……っ♡」

つい物欲しげな視線を送ってしまう私に、くすりと笑うルクフォード様。生温かくて濡れた感触が、刺激を待ちわびて腫れ上がったそこに触れる。

「んんっ♡や、あ……っ♡ひう♡んん、う♡ふ、う……♡やあ……♡だ、め♡だめっ……♡」

じらすように、まわりから、先端までをつう……♡となぞっていく。

やがて獲物を平らげるように、ぱくり♡と口に含まれてしまった。

「んあっ♡や、あ……♡ふう、ううん……っ♡や、あっ♡すう、のっ♡だめ、れすっ♡」

「いつも、こうやってされていただろう？」

「あ……♡ん、んっ♡ああ……っ♡やあ♡んんっ♡」

えっちな音を立てながら、ちゅうちゅう♡と吸われる。

きもちがよくてふるえながら、恍惚のため息をもらした。

これ以上なく勃起上がった私の乳首は、ルクフォード様にいじめられたがつている。

ぬるぬるの唾液にまみれながら、好き勝手なぶられて幸せそうだ。

「んっ♡んう♡やあ♡あっ♡やあ……♡だめ♡んん♡」

ぺろ♡れろ……♡ちゅぱ♡ちゅぱ♡って、ざらついた舌で愛でるようになぜられる。

もう片方は、親指の腹でやさしくぐに♡ぐに♡と押し込まれては、こりこり♡しこしこ♡と執拗にしごかれる。

びりびりするくらいの快感が脳へと伝わって、媚びるように脚を絡めてしまった。

「どうした？ こちらも、触ってほしいのかい」

「あ……♡は、い♡あ……だ、めなのに……♡でも……」

「駄目じゃない。ほら、君のここはこんなにも——僕を求めている」

これ以上なくぬるぬる♡と濡れそぼった秘所をあばかれて、ルクフオード様の指を汚してしまう。

「聞こえるかい？　このいやらしい水音が」

私を辱めるように、くちゆくちゅ♡くちっ♡くちっ♡とわざと盛大に音を立てていじられる。

「あ……っ♡や、あ♡ん♡んっ♡ごめん、なさい♡こんなに、しちやって……っ♡やらしく、てえ……♡」

「いいや、とてもいいことだよ。さて……夢の中で、君はどこを愛でられるのが一番好きだった？」

「あ……っ♡や、だ♡いえ、ません……っ♡だめ、だから……♡——あっ♡」

ルクフォード様の手が、私の脚を掴んでぐいっと大きくひらく。

欲に満ちた視線にさらされて、私のはずかしい場所がきゅうきゅう♡ひくひく♡とうごめいてしまう。とろお……♡と割れ目から蜜が滴った。

その頂で、膨らみきったクリトリスが、ひくん♡ひくん♡と主張している。

「ふむ……言葉よりも、よほどわかりやすいようだ。違うかい？」

「あ……♡ち、が……♡ちがう♡んです、さわって、ほしいわけじゃ……っ
あ♡あ……っ!？」

彼は含み笑いをしながら、巧みな仕草でそうっとかりの皮をむいた。

「君の大好きな弄られ方があるだろう？　いってごらん」

「っやあ……♡いけ、ません♡いえ、ない♡だめ……♡だめ、なの♡それ、
されたら……っ♡」

たやすく、雌に堕ちてしまう自信があった。

もう、既に手遅れかもしれないけれど。

彼の口元が近づいて、敏感なクリにふーっ♡と息を吹きかけられる。
それだけで、切なげにヒクヒク♡きゅんきゅん♡してしまった。

「ふう、う……っ♡っ♡んあ……っ♡——あああ♡」

っし、と舌先でクリトリス全体を撫で上げられる。

そのままちろろ♡ともてあそばれると、火がついたみたいな快感が襲った。

「あっあ♡だ、めえ♡やあん……っ♡ん、あ♡あ♡ああ……っ♡」

おそうじするように、丹念にほじほじ♡されると、腰ががくがく♡してしまふ。

「あ……っ♡あ………♡っだ、め♡なのに♡きもちいい……っ♡あ♡♡やあ♡♡」

全体を包みこまれて、ちうちう♡と吸われる。

それだけで、腰がぬけそうにきもちいい。

「他には？　どんな風にされていた？」

「あ……♡ほ、か……？　は、あ……っいえ、ない♡れすっ♡あゝっ♡っあ……♡」

途端に、ルクフォード様の唇がはなれていく。物足りなくて、かくかく♡と腰をゆらした。

「っあ♡なんで、やめ……♡あ、そうじゃ、なくて……っ」

「僕の夢と同じかどうか、知りたいんだ。言えるかい？」

「ん、んっ♡——ああっ♡んあっ♡ああ♡こりこりらめ♡れすっ♡だめ♡なの……っ♡ああっ♡」

指どうしでつままれて、こりこり♡とこすり合わされる。ぎゅう♡とつまみあげられたまま、ちろちろちろっ♡って舌でなぶられると——くるしい♡らしいの快感がおそう。

「あ——っ♡んっ、あ♡んんっ♡やあっ……♡っおかひく、なる♡あゝゝっ♡」

目の前がチカチカ♡して、クリを盛大にヒクヒクヒクン♡とさせて、

——イって、しまった。

「ああ、もう達してしまったのか。——良い子だ」

「んあ♡あ……っ♡っひい、んっ♡んう……♡や♡あ——……♡」

よし♡よし♡とイってる最中のクリをあやされて、もう一度イってしまふ。
イったあとの気だるさと幸福感に、ぼうつと身をゆだねる。

……おかしい。私の体、こんなに感じやすかったっけ？

夢よりずっと……気持ちがいい。リアルで鮮明な快感に、ぜんぜん抗えない。
い。

きつと、発情してしまってる、せいだ。ルクフォード様の、言うとおり。

それって、『運命の番』だから……？

「結局、君はあまり教えてくれなかったな。仕方がないから、ここからは僕が教授しよう」